

令和元年度第1回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和元年7月1日（月） 午後1時～午後3時

■開催場所：職員会館かもがわ2階 中会議室

■議題：

- (1) 市民参加推進フォーラムの令和元年度の取組について
- (2) 令和元年度市民公募委員サロンの実施について

■報告事項：

- (1) 新たに設置された附属機関等について
- (2) 市民参加に関係する新しい事業や取組について

■公開・非公開の別：公開

■出席者：

市民参加推進フォーラム委員 10名

(内田委員, 乾委員, 篠原委員, 菅谷委員, 橋本委員, 杉山委員,
ハッカライネン委員, 森川委員, 森実委員, 山野委員)

■傍聴者：なし

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し、後日、音声配信を実施する。

【議事内容】

1 開 会

2 委員自己紹介・座長挨拶

<事務局>

議事に先立ち、皆様に自己紹介をお願いしたい。

(以下、委員及び事務局自己紹介 略)

3 議題

議題(1) 市民参加推進フォーラムの令和元年度の取組について

<杉山座長>

議題「市民参加推進フォーラムの令和元年度の取組について」に入りたいと思う。まずは事務局から資料の説明をお願いします。

<事務局>

（「市民参加推進計画」の説明後、資料1「第2期市民参加推進計画改定版の進捗に係る確認・分析と次期計画の策定にむけて」、資料2「市民参加推進フォーラム令和元年度スケジュール（案）」、資料3「次期「市民参加推進計画」策定スケジュール（案）」、参考資料5「平成22年度第1回市政総合アンケート報告書」説明）

<杉山座長>

今年度何をするかという点について、説明をもらった。

昨年に引き続き、市政参加についての分析を行う。市民と未来像を共有できているか、どの程度できているかを調査するということである。手法としては他都市の先進事例を調査して、京都市はどうか、京都市はどうしていったらよいのかということを考えていきたいということである。委員の皆様から、忌憚なく御意見いただきたい。

<乾委員>

「市政への参加」とは、どういったものをいうのか。これまでは「市政への参加」をどのようなものと捉えて議論してきたのか、教えてほしい。

<杉山座長>

例えば、市の行う事業に参加する、アンケートに答える、会議を傍聴する、市民公募委員に応募するなど、非常に幅広い参加の仕方があるという認識で議論を行ってきた。

<乾委員>

様々な分野で参加の度合いも様々にあるということか。

<杉山座長>

幅広く、多重層になっている。つかみにくい部分もある。

<森川委員>

昨年度も同様の議論があった。「市政への参加」については体系立てるところまではいかず、「これは市政への参加になるのか」と事務局に聞き、その都度事務局に答えてもらって判断していたこともある。

<内田副座長>

昨年度は、若者に市政参加の経験についてアンケートをとる際、「市政参加するとはどういうことか」をイメージできるように、「市が実施するアンケートに参加したことがある」、「市民公募委員制度に参加したことがある」…等と項目立てを行った。その項目を、市政参加の例としてとらえた。

参考までに昨年のアンケートの結果等を事務局から共有してもらえたら、もう少し分かってもらえるかと思う。

<事務局>

市政への参加については、京都市が準備した制度（パブリックコメント、アンケート、ワークショップ等）に参加いただいたものをいっている。審議会の公募委員も参加の一つの形である。広く色々な制度があり、制度自体も広がっているのかと感じている。

<乾委員>

量的な観点からも確認をするということなので、項目があって量的な判断があると思うので、確認させていただいた。

<杉山座長>

今年度何をするかという点については、ご理解いただけたらどうか。資料 1 に書かれている内容を、スケジュールにしたがってやっていくということである。

<森川委員>

今年度は施策 2, 3, 7, 9, 10 の進捗確認と、次に何をするかということを議論するのだと思うが、京都市の現状の評価方法については、歴代フォーラム座長のヒアリングくらいしか書かれていないと思うが、どう行うのか。

<事務局>

他都市の先進事例を調査する前に、まずは京都市の取組状況を把握しようと思っている。「京都市はこういう取組を行っているが、その一方で、他都市ではこういう事例がある、京都市として盛り込めることはないか」という資料を作り、次回以降お示しして議論いただきたいと思っている。市の全ての取組について把握するのは難しいが、まずは特徴的な事例をもとに、他都市と比較して検討したいと思っている。

<篠原委員>

施策 2 の「市民と市職員の対話の推進」、施策 9 「あらゆる市政分野での市民と京都市の知恵と力を最大限いかす協働の推進」について、対話の場はたくさんあると事務局から説

明があったが、どういうものが「対話」なのか。

市職員と市民が対話するのはすごく難しいと思っている。説明会のようなものも対話としてカウントしているのか。例えば、民泊についての説明会を開催する場合、職員が町内会に説明に来るといったものも対話としてカウントしているのだろうか。

<事務局>

カウントしている。

市民参加推進計画の冊子 21 ページに施策の推進例として挙げているが、今までやってきている説明会のようなものについてもその一つであり、対話がより進むような工夫をするよう、庁内で進めているところである。

<杉山座長>

対話は難しいと感じておられるとのことだが、篠原委員はどのような点で難しいと感じるのか。

<篠原委員>

私が仕事で、行政の方と市民の方が一緒に話す場を運営する際に、グラウンドルールの伝えているのは、「職員のその場の発言が、直接“京都市”を代表する意見ではない」ということである。職員がその場で「やる」と言っても、必ずしもできるものではない、ということ伝えていく。

どうしても市民の中には、「こうしてほしい」という要望を言いたくなってしまう人がいる。要望を言われると、行政職員もどうしても構えてしまって、一参加者としてその通りだと思ったり、色んなやり方がある、事情があるということが言えなくなってしまう。

京都市の代表意見ではないということ伝えることで、行政の方を安心させる意味合いもある。市民の方に、行政職員のことを「市政についての知識をたくさん持っている人」として、仲間として話しましょう、と、行政職員と市民が対立してしまわないように何度も言うようにしている。

<内田副座長>

私も同様の場を動かすことがあるが、やはり、市にひとこと言いたいと思って参加している人もいます。攻めるモードが始まると対話にならないので、お互いのスタンスを明確にして始めることが多い。

説明会については、前に説明者が立ち、反対側に聞く人たちが並ぶというスクール形式で行いがちだが、対立が起きやすかったりする。その点については「対話」と捉えられるような工夫があるかどうかという視点で見ていくことができるかもしれない。説明会自体の数はかなり多くあると思うが、そうした工夫があるかどうかというのは、「対話」と言え

るものであるかどうかを考える際に、一つのポイントになるだろう。

<杉山座長>

「対話」が大事、意見を言っただけ、聴いただけにならない仕掛けが大事であって、それがどうなったかということの評価の中心に据えていくということかと思う。

<森川委員>

私もそう思う。行政の方と一緒に仕事をする際には、個人と組織、本音と建て前を切り離して扱うというのがコツかと思っている。

私も昨年、対話が難しいなと思った場面がある。所属するNPOが事務局をやっている、京都市内の景観づくり協議会のネットワークがある。昨年度、市から「新景観政策の更なる進化」に関する案が出たときに、そのネットワークから意見書を提出するという事になった。パブリックコメントはやっているのに、意見書を提出するという流れになったのは、京都市が打ち出した政策が、それまでに自分たちとやってきたところからずれた、信頼関係を損ねる動きじゃないのか、という中身だったためである。

普段は、市の職員が毎回オブザーバーとして参加してくれており、市民参加推進計画の施策の推進例 4 つ目「市民同士が地域のまちづくりの問題の発見・分析や課題の設定に取り組む場に、市職員の積極的な参加を推進」に当てはまるものだった。しかし、そのようなことになった。未来像の課題と共有、次の施策にどう生かしていくのか、ということは難しいと感じる。

行政は地域の方を向いてだけいればいいという話ではなく、色んな方面からの意見、情報を受け止めて、取捨選択して政策立案をしているのだと思うが、そのうえでの対話、共有というのは難しいなと思った。

<篠原委員>

先ほどの発言に補足するが、私が気をつけているのは、行政の方ができないことを、どう「できない」と言わせてあげるか、ということである。行政職員は市民の声を聞く役割になりがちなので、「できないから、どうすればいいのかを一緒に考えましょう」と言える関係性をどう作るのかが大事だと思う。そういう関係性があればいいのかな、と思う。

<乾委員>

今話題に挙がっている対話というのは、人と人とのリアルな場面での対話と、政策立案過程における対話、2種類あるようである。

様々な関係者とどれだけ対話ができているのか、という視点で言えば、プロセスをどれだけ経てきたのかという点が見えれば、相互理解が深まる気がする。

どちらの対話を施策でいう「対話」とみなすのかによって、見え方も、やっていく事業

も異なる。その辺は丁寧にやった方が、後々評価する際にいい知恵が出てくるのではないかと。また、他都市の先進的な取組を見に行く際にも、その視点があれば、京都市の課題にあった都市へ視察に行けるのではないかと思う。

<杉山座長>

対話について重要な御意見をいただいた。

おそらく、行政の方と対話を重ねるということについて異論はないと思うが、それがどんな形のものであるのかが大事だということである。行政が開いた会議では対等な立場に立った対話が難しい場合に、第三者が開いた会議で、行政の方と市民がいかに円滑な対話をする事ができるのか、ということの評価していく。それがいい社会につながるということ。

また、何かを決める際のプロセスにおいて、対話を重ねながら双方に信頼関係をはぐくむようなプロセスが必要なのだということ。

対話については、この二つを分けて考えていくということ定義して、目的を明確にするというのは重要ではないかと感じた。

<ハッカライネン委員>

少し違う話題かもしれないが、対話の場に誰を呼ぶのかが問題で、それにかかっている気がする。誰がその場に参加できるかという点が透明ではなく、行き当たりばつたりのように見えるときもある。行政が行う会議などは、誰が参加できる、どこで参加できる、誰が呼びかけた等が明確になるとよいと思うし、その必要があると思う。

<内田副座長>

「市民」と「行政」ではなく、「市職員」との対話と書かれている点が気になっている。「人」まで落とした書き方である。市民と職員が対話することによってお互いに学び合って成長するというのが、盛り込まれている気がする。

市側の成長は、行政としてのステップアップだけではなく、対話を通して市民が何を得たのか、市民がどういう視点で行政に対する理解が深まったのかなど、お互いの成長度合いが一つの評価の指標になるのではないかと。お互いが分かりあい、お互いが学び合うために対話をしている部分もあると思う。そういう視点で見た際に、他都市の事例はどういう風に見えるのかということは気になる。

<杉山座長>

成長度合いというのは、対話した結果による度合いということか。

他都市の先進事例で、対話の前、対話後を見なければならぬのは大変だなと感じた。

<篠原委員>

他都市の事例はどういう風に決まるのか。

<事務局>

例で示した四つは、我々が他都市を見た際に、京都市とは少し違った取組を行っているのではないかと考えたものを挙げている。これもあくまで例であり、これ以外で情報があれば、ぜひ教えていただきたい。

<杉山座長>

今いくつか対話について御意見をいただいた。他都市で「市民と行政職員がこういう良い対話をしている」ということを知っていれば、ぜひこの会議で挙げていただければ、そこが調査対象になりうる。

<篠原委員>

市民参加推進計画の施策3「市民と多様な主体が対話する機会の充実」の、多様な主体というのはどういうものをいうのか。市民のなかに多様な主体と入っているのを、わざわざだして「市民と多様な主体」としているのは、どういう意味があるのか。

<事務局>

施策3は、市民とNPO、市民と企業など、市民同士が対話することを言っている。

<乾委員>

先進事例の話だが、四つのうち神戸市と生駒市は副業解禁という点で有名である。神戸市が副業を解禁したのには色々な理由があると思うが、私が知っているのは、NPOやそういった活動の担い手がどんどん減っていく中で、行政が担う、副業としてやってもいいのではないかとということでのようである。行政マンでありながらも一市民であるので、任意団体にも所属するということを認めたということだと思う。

副業的なものをイメージしてこういった都市を視察に行くのかと思ったが、それはうがった見方なのか。それともたまたまなのか。副業という点についても、この市民参加を扱う会議で議論することなのか分からないが、多少イメージして議論した方がよいのか。

<事務局>

例に挙げた都市が副業を解禁している都市だったのは、偶然である。

市民と市職員との対話と言っている点については、私の個人的な考えかもしれないが、この間職員一人一人の伝える力の向上に努め、一人の行政マンとして市民一人一人と対話することを大事にしてきたという経過がある。あえて「市職員」という言葉を使ったのは、

職員一人一人が、市民一人一人としっかりと対話する、ということだととらえている。

<乾委員>

であれば、評価する際には職員一人一人のことも俎上に挙がってくるということになるかと思う。会議に誰を呼ぶのかというデザイン力のことであったり、どこまで協働を意識しているのか、どこまで政策プロセスにおいて対話を意識しているのかといった点についても、この場で評価していくということになるということかと思う。

<山野委員>

質問だが、市職員というのは、ワークショップや説明会といった対話の場に、どれだけの情報や権限を持って参加されているのだろうか。

<事務局>

色々あるかと思う。説明会という場では、説明をするという役割を持ってきているのでそういう役割を持って参加しているだろうし、ワークショップで本当に自由な意見交換をする場というのものもある。場によって、役割や権限が変わると思う。

<山野委員>

勝手な見解だが、職員の方は、情報はたくさん持たれていると思う。説明会のような場は情報を発信する場だと思うのでそれで十分だと思うが、対話やワークショップになると、市民は、その場で自分の意見が通ると思ってしまったりすると思う。市職員ができるのは説明であったり、市民からの意見集約が限界かなと思うので、ワークショップ等において、市民にそういう期待を持たせるというのが間違いなのではないかと思ったが、そのへんはどうなのだろうか。

<事務局>

先ほど、対話の場を分けて考えるということを行ったが、特定の事業を説明する場においては説明しているし、できることできないことははっきりしている。しかし、この先どういう施策を展開していけばいいのか行政側もはっきり見えていないものも多々ある。そういう時の対話は、行政マンとしての知識と経験は持って臨むが、市民と行政というよりは、色々な知識や経験を持っている人との対等な対話、それぞれに解決策を見出していくということを期待して臨んでいるということもある。対話の場は、本当に様々である。

<菅谷委員>

私の経験から言うと、市民と市職員との対話というのは、行政が施策を進めていくにあたって説明に行くという場合の対話が圧倒的に多い。ゴミ袋が有料になったとき、色々と

説明したいと行政が説明に来たことがあった。たまたま、説明に来られたのは地元の区役所にいた方で、顔が見える関係性だった。その人が説明すると、通常であれば紛糾する可能性のある議題であったが、何も起こらずすんなり終わった。職員と市民が普段からどう付き合っているかということが非常に大事で、そこさえあれば、施策を進めるためのハードルは低くなると実感した。

<杉山座長>

森川委員もおっしゃっていたが、対話なりを通じて、関係性、信頼感を築いているかということが大事だということだと思う。

<森実委員>

市民の参加や対話にどう関わっていくか、どう広げていくかというテーマは非常に抽象的で非常に難しいと感じる。就任時に説明頂いたが、審議会だけで200~300あるし140万の市民がいて、一つ一つの政策等に審議会があり、政策決定にもいろいろなプロセスを取り込み、実行されている。色々なテーマがあって、それぞれに色々あると思うので、先進事例を調査するにしても、具体的な事柄を挙げて調査してほしい。

既に京都市がやっている中にも、反省しないといけないこと、教訓になることがたくさんあると思う。具体的なことを見ることによって、市民参加の在り方を広げていくことができるのでは、情報提供できるのではないかと思う。

審議会の中に何人公募委員がいるかということではなく、説明会を何回開いたということではなく、全国で困っている、京都市でも市民とどう進めていけばいいか困っている具体的なテーマを考慮に入れて、検証していくという考えがあってもいいと思う。

<篠原委員>

先ほど事務局が言ったように、そもそも、行政職員が設ける場がすべて対話の場ではないと思う。説明する場、市民の意見を集約する場という形で、最初に言ってしまうと混乱することもないし、使い分けておられると思う。

<杉山座長>

多分、計画に掲げる方針が重視しているのは「対話」で、対話の先にある信頼関係の構築や、市民のやる気を生み出していくということが本質的な部分かと思う。

対話を通じてどういう施策につながっていくのか、施策を行ううえでの問題解決につながるような、実感が見えてくるようなアウトプットなり情報共有なりができると、市民も分かりやすく、腑に落ちるのだと思う。

数字だけ見るとピンとこないが、「こういう問題が、こういうプロセスを経たことによって解決したし、信頼関係が築けたし、市民の信頼も得られるようになった」と分かれば、「な

るほど」と腑におちる。すると、行政側も市民側も「こういうプロセスは手がかかるけど大事だね」ということになるような気がする。

<乾委員>

施策 2～10 の中で、どういう風になったかというのはこの場で検証してもよいのかもしれない。どういうプロセスでああいう説明会になったのか、市はどのようにしているのか、どうした方が市民参加の観点でよいのかということは検証してもよいのかもしれない。

<森実委員>

先進事例の話で言うと、反面教師的なことも学べると思う。子育てや景観政策など、他都市と共通するテーマはあるのだから、そういう視点で市民参加がどう進められているのかというのは一つ例に挙げて考えてみるというのはありだと思う。

<乾委員>

プロセスがどうだったかということで、事例を集めるのは良いことだと思う。多様なプロセスを出してみて、それを市職員が見て、教訓としていけるようなデータベースとして使っていけるようなものというイメージである。既に市内部にはあるのかもしれないが。

具体的なことをもとに何かを見るのであれば、そういったものは必要かもしれない。

<杉山座長>

この場でそういうところまで広げて検証した方がいいのか。若しくは、それを検証候補に入れるのは違うのだろうか。

<内田副座長>

具体的な事例が今共有できているわけではないので、どういったことを対象とするのか、しないのかという点については掘みにくい部分が多いと思う。次回以降、具体的な話がでてきたときに、対象とすべきかどうかを議論していけばいいのではないかと。今、そこまで判断するための議論をするのは難しいのではと感じている。

<事務局>

色々と重要な御意見をいただいた。対話があって、そのゴールとして、未来像や課題の共有、その間には、色んなプロセスや段階があるということだったと思う。

対話の在り方や効果として、市民と行政の信頼関係を築くもの、市民、市職員の能力向上のためのもの、情報の共有、という点が挙げられたかと思う。

具体的な事例とつなげて話すのであれば、具体的な事例が今挙げた 3 つの中のどこと紐づくことになるのかということをお教えいただき、他都市事例を調査する際の参考とさせて

いただきたい。

<森実委員>

特にどの点でという話ではなく、具体的な話をもとに議論した方がよいと思う。

他都市を参考にするのであれば、具体的な例を挙げて、どういう話し合いを進めていったためにこじれたとか、そういうことを知りたい。京都市の状況を一度整理したうえで視察に行くということだったので、京都市が今どういう風にやっているのかということについては、課題を考えるうえでも、具体的にとらえた方がよいのではないかとということである。

<乾委員>

重点的な取組が5つあって、その5つそれぞれにまとめてから、5つの先進事例を見に行くというようなイメージか。

<森実委員>

そこまで具体的に考えているのではなく、話を具体的にしてほしいという提案である。アウトプットの仕方も非常に分かりにくいので、具体例を挙げて、こういう風に進んでおり、市民参加の観点ではこういう風にした方がいいのではないかとか、そういう形で見たいということである。

<杉山座長>

視察に行く際に結果が具体的に出た事例を見に行くほうがよいということか。

<森実委員>

それもそうだし、審議会の数と公募委員の人数のようなデータよりは、具体的にこういうことをやっていて、こういう議論が行われているという資料をもとに議論した方がよいのではないかとということである。

<事務局>

今年度分析予定の施策については、数字では把握しにくいものが多い。京都市の具体の施策、特徴的な取組をまとめたうえで、他都市視察を行い比較したいと思っている。

<杉山座長>

スケジュールについては、何か意見はあるだろうか。

<篠原委員>

スケジュールについて私は理解した。

他都市の先進事例については、今お伝えした方がよいのか。

<杉山座長>

もしあればお願いしたい。

<篠原委員>

京都市の職員の中でファシリテーターを養成されていると思う。実際にファシリテーターになった職員は対話をしに対話の場に出ていっていると思うので、その場はどうなっているかというのを入れておいてもらいたい。

牧之原市に関しては、施策 3 に関する取組だと思う。それぞれの施策、若しくは施策をミックスする形で先進事例があればよいと感じた。

施策 2 に関しては、市職員として参加している場合と、市民として参加している場合があると思うので、難しいかと思った。

視察は誰が行くのか。

<事務局>

視察は事務局で行き、書類でまとめるのでそれをもとに議論いただきたい。

<杉山座長>

候補地について、他に思いつくものがあれば挙げていただきたい。

<乾委員>

地方に行けば行くほど、待ったなしで取り組んでいる。都市型で取り組んでいくのか。どこを学び取るのかということで、違うこともあるだろう。

職員側だけ見ているのか、市民側の変化も見ていかなければならないとも思う。両方の変化があって初めて成り立つ部分なのかなとも思う。

<杉山座長>

今後、他都市視察の結果が出てきたときに、どう深められるかという点で議論することができるかと思う。

視察先について思いつく場所があれば、メールなどで教えていただけたらと思う。

<ハッカライネン委員>

具体的な取組例は分からないが、「こういう事例があれば探してほしい」ということを言ってもいいか。

外国籍住民で、対話の中に参加している事例があれば紹介していただきたい。

<杉山座長>

貴重な御意見，ありがとうございます。

議題（2）令和元年度市民公募委員サロンの実施について

<事務局>

（資料4「令和元年度市民公募サロンについて（案）」説明）

<杉山座長>

市民公募委員サロンは，フォーラムが主催して実施するものである。日程は調整中だが，事務局を通じて審議会に所属する公募委員に案内し，参加してもらう。当日の進行等についてもフォーラム委員がテーブル等に入って公募委員の方々から意見を聞くという取組になっている。

質問等はないか。

<橋本委員>

基本的な質問だが，京都市の様々な附属機関というのは，委員会と同じものか。そのリストのようなものはあるのだろうか。

<杉山座長>

附属機関等とは委員会等の審議会の総称である。

（事務局から橋本委員にリストを渡す。）

<内田副座長>

橋本委員と同じように，市民公募委員として京都市の様々な附属機関に参加されている方がいるのだが，それぞれの会議には1人や2人ずつしか公募委員は所属していないので，会議の中で自分たちがどういう役割を担えばいいのかと悩まれることが多い。なので，違う会議に所属するけれども同じ公募委員という立場で情報共有する場として，フォーラム主催で行う場がサロンである。

<菅谷委員>

去年のサロンは面白かった。どの参加者からも話が聞けた。

<内田副座長>

1部2部という事務局案が示されているが，この点についても何か意見があればいただき

たい。

<篠原委員>

去年は、グループに分かれて話す時間が、盛り上がったときに終わってしまう感じで、短かった。長くすればいいというものでもないが。

テーマについてはいいと思う。来た人で話し合いたいテーマを出すというのも、やり方としてはいいなと思う。

<杉山座長>

人数を少人数にしたのも、たくさん話す機会があってよかった。

<山野委員>

回数を2回するというのは、なぜか。

<杉山座長>

昨年度は時期が遅かったので、時期を早くして1回行おうということである。

<内田副座長>

また、サロンに参加してから会議に臨んで、どうだったかということ振り返れる場ということで2回行うということになった。

<山野委員>

参加者は1回目も2回目も一緒なのか。

<内田副座長>

どなたでも参加できるので、2回とも参加される方もいれば、1回だけしか参加しないということもある。昨年度は12月に開催しているので、内容を見て「似たような内容だから前回参加したから今回はいい」と思われる方もいるかもしれないし、今年度初めて市民公募委員になられた方が参加するということもある。

現在、公募委員は京都市全体で何名おられるのか。

<事務局>

214名である。

<内田副座長>

前回もその程度おられる中での、参加者数28名なので、より参加の機会を増やすという

意味でも、2回できるといいのではないかというところである。

<山野委員>

アンケートについて「改善した方がよい」と書かれている部分を改善して実施したらよいということによかったらどうか。「若い人が参加するような取組を増やしてほしい」とあるのは、前回はそうではなかったということだろうか。

<事務局>

前回の出席者は比較的御年配の方が多かったのですが、もしかしたら、そういう意味でそうした御意見が出たのかもしれない。

<内田副座長>

こうした場を持つと、やはりどうしても「若い人たちが市政参加に加わるにはどうすればいいのか」というのは必ず出てくる論点である。サロンにというよりは、公募委員のようなものに若者に参加してもらうにはどうしたらいいのか、という論点で話すことが多い。フォーラムが主催する会議として、若者が市政参加するきっかけになるような企画も考えてほしいというような御意見だったのかなと思う。

<森川委員>

私のテーブルにいた方の話かは分からないが、その方の所属する会議の公募委員はどちらも御年配方だったので、どうして若い人は入ってこないのかという話は出ていた。

<事務局>

昨年度は兼松委員が中心となってサロンを運営していただいた。今回も、中心となって事務局と一緒に企画を進めていただける方を決めていただけると助かる。

<杉山座長>

昨年は、兼松委員が柔らかい雰囲気ですべてを進めてくれて大変良かったと思う。ファシリテーターに慣れておられる方をお願いできたらと思うが、どうだろうか。

座長指名で、篠原委員をお願いしてもよいだろうか。

<篠原委員>

私か兼松委員、どちらかがやるか、日程を確認する。

<杉山座長>

これについても、何か意見があればまたメーリングリスト上でいただきたい。基本的に

は前回の内容をベースにしてやるということによいだろうか。

<事務局>

日程の話で言うと、2日候補日が上がっている。また、第1部のゲスト案を示しているが、フォーラムの過去の公募委員や座長等に事務局からあたってみたいと思っている。

<杉山>

最後に報告事項について、事務局から説明をお願いします。

4 報告事項

報告事項（1）

<事務局>

（資料5「新たに設置された附属機関等に係る協議結果（一覧）」報告）
（質問、意見等なし）

報告事項（2）

<事務局>

（資料6「市民参加に関係する新しい事業や取組」報告）
（質問、意見等なし）

<杉山座長>

以上で本日の議題、報告事項は終了となる。皆さん、どうもありがとうございました。

7 閉会

<事務局>

本日も闊達な御意見、ありがとうございました。対話という話があったが、まさしくこの場合は、どうすれば市民協働が進むかということについて結論を誰も持っていない中で、議論いただいております。お知恵をお借りする場だと改めて認識した。

計画改定の話をしていただいたが、短期的には、令和2年、来年度が京都市の基本計画を改定する時期にあたる。中長期的に見ると、更に5年後の令和7年が、25年スパンの京都市基本構想を改定する時期にあたる。人口減少や地域コミュニティの課題など、大きな課題を見据えて、京都市政をどうしていくのかを色々と考えて市政、事業に落とし込まなければならない時期になっている。色々な危機や課題をしっかり受け止めて、色々な方と対話をしながら次の施策を考えていきたいと思っているので、引き続きよろしく願いしたい。

以上